

■（５４）取材でも大切なのは「沈黙は金」

サイレンを鳴らす消防車を追って、海岸沿いの小さな集落に向かった。夜の火災で、激しく吹き上がる炎が住宅を包んでいた。ぼうぜんと見守るしかない中、ポケットベルが鳴る。デスクからの呼び出した。公衆電話を探す。携帯電話のない二十数年前、十円玉は記者の必需品だった。「原稿を電話で送れ」。まだ何も取材できていないのに、だった。

警察や消防などの報道機関向けの発表とは異なり、住民から話を聞くのは簡単ではない。たたみかけるように質問しても、返ってくるのは「はい」「さあ？」といった簡単な反応だけになりかねない。その後、経験を積んで実感したのは「沈黙」の大切さ。相手に考える時間を与えることだった。そっけない答えをしていた人も、しばらくすると、「そういえば…」と何かを思い出してくれる。もっと詳しく知る人を紹介してくることもある。

冒頭の火事に戻ると、いつ、どこで、何が起きたかを伝える「本記」は原稿にできなかった。電話で送れたのは、現場の混乱ぶりを伝える「雑観」のデータだけだった。（山）